

かがやき

令和4年 2月21日(月)
多摩市立連光寺小学校
特別支援教室 かがやき学級
学級通信 NO. 16

～子供をとりまく環境を意識する～

「フジファブリック」というバンドの楽曲に「茜色の夕日」という歌があります。この歌の歌詞の一節に「短い夏が 終わったのに今、子供の頃のわびしさが無い♪」というものが出てきます。この詩の一節から思うのは様々な成長を重ねていく「子供時間」の長さです。子供の頃のひと夏が過ぎる時の感覚が大人になっていくと変化していく。多くの方が経験するこの差こそが子供と大人の「時間感覚」のちがいののだろうなあと思います。

こうした差がどうして生まれるのか。19世紀のフランスの哲学者ジャン・ジャネーは生涯のある時期における時間の心理的長さは年齢に反比例すると主張しました(「ウィキペディア」)。もう一つの例として、わかりやすい計算式で紹介されているものもあります。簡単な式にすると大人の年齢÷子供の年齢=子供の時間感覚の倍率ということになるそうです(「聞く聴くドリルステップ3 文英堂」)。例としてみると、6歳の子どもが感じているのは30歳の大人が感じている時間の5倍の時間ということになります(諸説ありますが)。この考えでいくと単純に6歳の子どもの10分の集中時間は50分に置き換えられます。この話を学校生活での子供たちに当てはめて考えてみました。先生の年齢や子どもの学年のちがいもありますが「う～ん、みんな大人よりも長い時間感覚で勉強して頑張ってるんだよなあ」と感じました。一コマの授業。私たち教師の話聞く時間。宿題。習い事。ゲーム。食事。睡眠。友だちとの遊び。いろいろな場面での時間を子供がどう感じているのか。子供の気持ちを理解しようとする時、子供に見通しをもたせようとする時等々、様々な生活場面で日ごろ私たち大人がもっている時間感覚と発達途上の子供がもっている時間感覚のちがいを意識して話しかけ、考えていく視点も大切だなあと思いました。

0か100ではない考え方～「さんねん峠」にみるポジティブ思考の受け入れ～

3年生の国語教科書の物語文に「さんねん峠」という作品が出てきます。お話は、転ぶと3年しか生きられない言い伝えがある峠でおじいさんが転んでしまいます。おじいさんは言い伝えを信じて悲観し、病気になってしまいます。ただ、近くの若者が一回転べば3年なら、十回でも百回でも転べば長生きできるとおじいさんに提案します。するとおじいさんは気持ちをきりかえることが出来、峠でたくさん転び元気を取り戻すことができるというものです。かがやきの授業の中ではこの場面をポジティブに気持ちをきりかえる場面として取り上げて考えていきます。話の流れを整理しながら「そもそもおじいさんはどうして病気になってしまったのだろうね?」と話をしていくと、「言い伝えを信じるあまり、気持ちが落ち込んだから」「ふさぎ込んでご飯を食べなかったから」(先日の自律神経の話にもつながりますね。)いろいろな見方が出てきます。そして、「おじいさんが元気になれたのは?」ここで「気持ちをきりかえたからでしょー!」と話を落とすようにするのですが、「病は気から」という言葉とともに、「考え方」「捉え方」についても見方を足して「前向きな考え方」や「他の考え方」を試すことで物事が良い方向にも動くことを伝えて指導します。「絶対無理。」「もうだめだ」という「0」の発想ではなく、「ものは試し」という「0」以外の発想に結びつけられる場面が増えていけばいいと思いました。

